

「木の家」づくりから“林業再生”を考える委員会・報告骨子(2010. 5. 18/NO3)

## 二地域居住メモ

報告者／小池一三(町の工務店ネット代表)

### 都市部の週末の過ごし方は、クライנגアルテン型か、ダーチャ型か？

**クライנגアルテン**＝起源は1832年。失業対策事業を兼ねて市民の手で開墾させた農園として始まった。提唱者とされるダニエル・シュレーバーは、産業革命の影響による都市化に伴う生活環境の悪化から子どもの遊び場に腐心、死後、クライングアルテン運動へ。普仏戦争や第1次世界大戦では食糧自給政策として取り上げられたが、大戦後は都市政策として、ワイマール共和制期クライングアルテン法が制定(長期契約/25年を保障する内容)。第二次大戦後、東ドイツでは、3戸に1戸がクライングアルテンを所有。野菜や果物の3～4割を占めた。西ドイツは、高齢化社会が社会テーマになった1980年以降活発に。1986年に建設法制定、都市政策として位置づけられる。1990年の東西統合以降、旧東地域のインフラ整備に多額の費用が必要となり、開設数が減少し、設備の老朽化が進んだ。現在、110万区画あり増えていない。特徴/1区画の面積が平均約300㎡。屋根投影面積24㎡以下の平屋小屋(ラウベ)が建つ。簡単なキッチンと休憩できるリビング。原則として宿泊は禁じられている。電気や電話も配備されていない。クライングアルテナーが共同で建設するクラブハウスが附帯する。利用契約：賃貸期間が25年あるいは無期限となっている。配偶者以外に権利は譲渡できない。利用料金：利用料金が年間3万円前後。利用者は、集合住宅の二階以上の居住者に限定。庭を所有する集合住宅の一階住民や戸建の住民は利用できない。環境に配慮：都市内の緑地であることから、農薬や肥料の使用が制限されている。土地の確保と造成工事は自治体が行い、クラブハウスや平屋小屋(ラウベ)は利用者が建設。

**ロシアのダーチャ**＝性格としては、「家庭菜園付住宅」。起源は、レーニンの10月ロシア革命(1917年)にさかのぼる。レーニンのスローガン/すべての農民に土地を(農民への農地再分配政策)。スターリンの農地集団化政策によって反古に。その代償として「自留地」が与えられたのがダーチャ。ダーチャとは、ロシア語で与えることを意味する「ダーチ」。ダーチャが威力を発揮したのは、ソビエト崩壊期。職を奪われ、スーパーの前に行列をつくる市民の映像はあったが、餓死した人が続出したという報道はなかった。食をみずから生むことでロシア人は生き延びた。現在、ロシア人の85%がダーチャを保有。週末になると車は郊外に向けて交通渋滞になり、日曜の夜は逆方向の混雑が激しくなる。ロシアのジャガイモは、中国に続いて世界第二位の生産量。その92%はダーチャにて勝手栽培。ダーチャの土地の広さは600㎡、小屋の大きさは40㎡程度。

**日本における二地域居住の方向**＝クライングアルテンでは、①提唱者とされるシュレーバーの、子どもの遊び場に、という発想に立つもの ②都市政策として明確に位置づけられていること。③長期契約等に注目したい。ダーチャは、宿泊できる施設であることが大きく、都市部からの移動時間を考慮すると、日本では週末に生活できる「家庭菜園付住宅」ということになるのではないか。交通渋滞を考えると休暇分散化が望まれる。

**市民農業に関して**＝日本は“自作農主義”(所有者のみがその農地を耕作できるという考え)が前提とされた。市民が農地を耕作するのは“ヤミ小作”とされたが、行政によって現状が追認され、1989年に「特定農地貸付けに関する農地法等の特例に関する法律」(特定農地貸付け法)が制定され、農地法上の特例範囲として位置づけられた。利用者の期待は、区画面積が広い/利用期間が長い/有機農法で栽培されている/施設が充実している/林や生垣、池などを設え、全体として都市緑地としての機能を果たしている/土地所有者(農家)を含めた利用者相互のコミュニティの形成。

# 日本型の週末住宅を考える

『参勤交代論』が現実味を帯びて来た

文 畦上圭子

季刊誌『住む』10年夏号原稿

## 『吉里吉里人』のように

『バカの壁』で知られる養老猛司の“参勤交代論”が、政府の政策テーマに浮上した。これは一大ニュースとあっていい。

養老氏は著書だけでなく、週刊誌のインタビュー記事や座談会でも、テレビや講演会においても、この話を幾度も持ちだしてきた。はじめは突拍子もない話だと思ったが、こうまで執拗に蒸し返えされると、否が応でも関心が高まる。

今年になって、国交省に政策提言を行う委員会で、このテーマが取り上げられた。委員長は、何を隠そう当の養老先生ご自身である。

この委員会では、中央集権を思わせるからと“参勤交代”という言葉でなく“二地域居住制度”という表題で議論が進められている。行政的なニオイが強く、いささか香に欠けるけど、それだけ現実味を帯びてきたと考えたい。

養老先生のたくらみ、いよいよ効を奏し、というところである。先行き不透明な民主党政権とはいえ、こういう議論が俎上にのぼること自体、前の政権ではなかったことで、この委員会は、井上ひさしの『吉里吉里人』の議会を彷彿させて、愉快でさえある。

あの小説は、東北のとある寒村が政府に愛想を尽かし、突如「吉里吉里国」を名乗り、独立宣言する話であった。独自の通貨「イエン」が登場し、吉里吉里十愚人による言葉のやり取りは抱腹絶倒ものだった。

井上はこれを小説にする前に、同じプロットでNHKのラジオドラマに書いている。タイトルは『吉里吉里独立す』だった。放送はされたものの、政府批判と取られ、刺激が過ぎたのか、放映後、担当ディレクターは左遷されてしまった。

今回の議論も、ギスギスした従来型の枠組みのものであったら、あるいは不評を買ったかもしれない。今後、どのような提案が行われるのか、興味津々というところである。

## 背景に都市文明への飽き

養老氏が書いたものを読むと“参勤交代論”の背景に、都市文明への飽きがあるように思われる。

大都市は、人間の脳がつくり出した「脳化社会」になったと養老氏は指摘する。脳を発達させた人類は、都市文明をつくり上げたけれど、その文明は石油に依存したもので、人類が自分で生んだエネルギーではない。そして、この先石油が消費してしまうのは目に見えている。

石油がなくなったら、人類は今の文明を保持できなくなり、都市から離れ、

田舎に行くほかない。その気づきを促そうというのが、おおまか“参勤交代論”の論旨であろう。

確かに、今は都市に物が集中しているけど、本当に物があるのは地方である。経済評論家の内橋克人が、辺境の港で魚が水揚げされ、トラックで築地に運ばれるが、それを運ぶトラックから出る排気ガスは地球コストであり、このコストは回避されるべしといい、やがてそれは社会問題化されると言った。

考えてみれば人類は二〇〇年前まで、薪や菜種や鯨の油を燃料にしていたのであって、現代文明は化石燃料の利用を以て始まったのである。

ハイテクなエネルギーは危険が多く、事故を避けようとする、田舎に行くのが処方箋に合っている。森が健全に働き、人がお手入れを欠かさなければ薪は発生する。土を耕せば食にありつける。

解剖学者養老猛司の執刀によって、現代は、そんな瀬戸際、淵に立っていることを知らされた。これを突破するには、都市と田舎を“参勤交代”する根拠地が必要とされる。

## ロシアのダーチャ

根拠地づくりで参考になるのは、ロシアのダーチャである。ダーチャとは、別荘ほど高尚なものではなく、都市郊外にあって、週末に通う家庭菜園付住宅をいう。ロシア人の何と八五パーセントは、このダーチャを保有している。

日本人には、ドイツのクラインガルテンの方が知られているが、クラインガルテンは、ドイツでは二十四㎡以下の平屋小屋（ラウベ）以下に用途制限されており、宿泊が禁じられ、電気や電話も配備されない。通園型（利用者は歩くか自転車で通う。駐車場はない）であって、市民農園の性格が濃い。利用者制限もあり、集合住宅の二階以上の居住者に限定される。庭を所有する集合住宅の一階住民や、戸建住宅を保有する住民は利用できない。

ドイツ人は、こうしたことに実に厳格で、滞在型もありとする日本のクラインガルテンは、かれらにとって不可思議なものであるようだ。したがって、ドイツ人のアイデンティティを尊重し、滞在型をいう場合は、ロシアのダーチャに近い。

ロシア人は、週末になるとダーチャへと向かう。それによる交通渋滞が甚だしい。渋滞による混雑の労苦を強いられても、ロシア人はダーチャに行かないと始まらないらしい。

ダーチャの土地の広さは、およそ六〇〇㎡程度、建物の大きさは四〇㎡程度である。建物は小さいけど、土地は日本の通念からするとかなり広い。ロシア人は、週末になるとそこで土を耕し、その収穫物を車に積んで都市に戻るのがある。

ロシアのジャガイモ生産量は、中国に続いて世界第二位とされる。その九十二パーセントは、ダーチャによる勝手栽培によるものである。

このダーチャが威力を発揮したのはソビエト崩壊期であった。あのとき職を奪われ、スーパーの前に行列をつくる市民の映像はあったが、餓死者がいた、

という報道はなかった。それはダーチャがあったからである。食をみずから生むことで、ロシア人は、あの状況を生き延びたのだ。

ダーチャの起源は、レーニンの十月ロシア革命にさかのぼる。レーニンは、「すべての農民に土地を！（農民への農地再配分政策）」と演説したものの、レーニンの後、スターリンの農地集団化政策によって反古にされた。その代償となる「自留地」がダーチャだった。ダーチャの語源は、ロシア語で「与える」ことを意味する「ダーチ」である。

## まず移動形態、そして定着へ

“参勤交代”は、行き通いの形態をいう。田舎に故郷を持つ人はいいけど、寄る辺なき都市住人や故郷が離れている人は、ダーチャのように“自留地”があるといい。

“土地本位制”の日本で、そんなことは望むべくもないが、定期借地方式なら可能かも知れない。

定年になったら田舎に引っ込むことは昔からあったことで、目新しくもなく、めいめいの勝手のものであるが、それでは縁なきものは入手し難いのが現実である。ドイツやロシアのように、国によって制度化されたら大きく動くのではないか。

ロシア人のダーチャは、食料確保に必死のものであったが、日本では食の安全と、子どもの教育と、地震や都市災害が生じた場合の避難住宅や、それから定年退職後の“終の住処”などに利用されるのではないか。

形態的には、とりあえず週末の行き通いでいい。移動の混乱を避け、費用を少なく済ませるために、“休暇分散化”や“高速道路無料化”(参勤交代者には無料パス)がはかれると、これらも生きた政策になる。

そうして土を耕す喜びが生まれ、当地で職が得られたら、多分、人はそこに定着したくなるだろう。

この週末住宅は、土地は定期借地なので負担が軽い。建物も小さくていい。それなら入手できるかも、という期待を抱かせることが大事であって、高度経済成長期、“中流願望”が人を駆り立てたように、閉塞している経済は、そういうことで動くのではないか。

刻苦奮闘が似合わない当世の若者というなかれ。ものを考える若者と“団塊の世代”に火がつけば、ロシアのダーチャの八五パーセントに及ばずとも、これに日本人は、案外乗るのではないか。

漆黒の宇宙にあって、地球は土の中に唯一微生物が生息する星である。土に接することで、子どもも大人も多くが発見がある筈である。水辺があり、草木が茂ると昆虫が、どこからともなく現れる。その不思議に惹かれたら、都市文明など屁の河童である。養老先生は、ご自身の体験を通じてそれを知るが故、くどくも“参勤交代論”を語るのである。